

日本英語教育史学会 会報

284

2017 年 12 月 6 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
e-mail: membership@hiset.jp会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)
ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第265回研究例会報告

2017 (平成 29) 年 11 月 18 日 (土), 真宗教化センター しんらん交流館 (京都市下京区) において第 265 回研究例会が開催されました。参加者は 13 名でした。

例会では 2 本の研究発表が行われました。はじめに, 上野舞斗氏 (和歌山大学大学院生) が「戦前における英語音声学習の大衆化: カナ表記を中心に」というタイトルでお話しされました。続いて田中正道氏 (広島大学名誉教授) による「第五高等学校入学試験英語問題の解析」の発表が行われました。司会は拝田清氏 (四天王寺大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は上野氏, ②は田中氏の発表への感想です)。

◇ ◇ ◇

◆①上野さんの発表で, カタカナ表記については, /r/と/l/, /s/と/θ/の区別等について, くわしく説明していただけてよく理解できました。仮名表記については賛否両論ありますが, 中学校現場で指導している立場としてはとにかく英語嫌いを減らすように考えた時単語や英文が読めるだけでも生徒達にとっては英語を自ら学習していくきっかけになると考えている。更に研究を進めてもらって実際の現場で活用できるように著書などを出してもらえたらと考えている。 (藤原和彦)

◆①英語の音声指導における仮名表記をめぐる言説を分析されたご研究ですが, まずその分析体系を構築してそれに肉付けをしていくとのアプローチを理解しました。そのそれぞれのスポットに資料を位置づけていくという手続きに安心感を覚えるとともに, スポット間の接続をも視野に入れて体系としてまとめ上げられることを期待しています。 (Dragon)

◆①修士 2 年とは思えない完成度で, 自分の修

士の頃と比較して驚嘆, そして汗顔の至りです。さて, 発表後の質疑応答でコメントできなかった点を以下に書かせて頂きます。まず, 「研究の立脚点」で言及されていた「外国語教育は誰のため?—<できる人>目線でいいのか?」についてはまったく同感です。次期学習指導要領では, 「障害のある生徒などについては, 学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的, 組織的に行うこと」という文言が入りましたが, 実態としてはアスペルガーや ADHD などの児童・生徒を想定したもので, ダウン症など知的障がいを抱える児童・生徒への「外国語 [英語] 教育」については等閑視されている感が拭えません。このような学習者にも外国語を学ぶ権利と意義があることは疑う余地がありません。「英語教育のユニバーサルデザイン」に向けて, 今後研究を進めて頂けると嬉しく思います。次に興味深く拝見したのは「英語講義」(熊本謙二郎) において使用されていた /æ/ のカナ表記で

<発表を終えて>

上野 舞斗 (和歌山大学大学院生)

この度は、貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。

本発表では、戦前において英語の仮名表記がどのように受け入れられ、どのような役割を果たしていたかを明らかにしようと試みました。その中で、戦前期を代表する岡倉由三郎、市河三喜が仮名表記の有効性について主張していること、仮名表記が独習用テキスト（独習書・講義録・初学者用雑誌）等に用いられ、教育用表記として英語音声学習の大衆化を促進する一要因になっていたことが浮かび上がってきました。



なお、フロアから、市河三喜の仮名表記賛成論は本当に積極的なものだったかというご質問を頂きましたが、その後の調査で市河が仮名の活用について繰り返し主張していたことが判明しました。このことから市河の主張は積極的なものであったと言えるとお答えしたいと思います。このほか頂いたご指摘についても、今後の課題として研究を前進させてまいります。

末筆ながら、私の拙い発表に対して、ご質問や、鋭くも温かいご指摘を与えてくださいました皆様方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

す。カタカナの「エ」と「ア」を縦に連結させて作ったこの文字は、田●悟郎氏の発案かと思っておりましたが、ちゃんと元ネタがあったのですね。改めて「歴史に学ぶ」ことの大切さを思い知りました。ありがとうございました。

(拝田清)

◆①英語音声学習の「工夫」の歴史を学ばせていただき、参加しがいのある例会となりました。「正系」ではない学習を余儀なくされた多くの学習者の為に私たちの先達が払った労苦には頭が下がります。若いころ、在外研究員として英国に出張し、50ヶ国からの入寮生がいる学生寮で生活した時、たとえ「仮名表記」で学んだとしても日本人の英語は十分役立つと「確信」したことを思い出しました。

(もみじまんじゅう)

◆①英語音声学習の「大衆化」をキーワードに、レアな通信教育資料をも活用して仮名表記の教育的な役割を歴史的に解明した意義は大きいと思います。フロアからの意見も貴重でしたので、参考にされぜひ論文化して下さい。

(みかん舟)

◆②戦時下の英語入試問題という大変貴重な資料をお示し頂いただけでなく、その題材にま

で立ち入ってご解説いただき、本当に勉強になりました。3月に実施された試験問題の解答・解説集を4月の段階で発行するというのは、現行の『全国大学入試問題正解』（旺文社）が毎年6月に刊行されることを考えても、田中先生が指摘された通り、驚異的な速さでの執筆であったと思います。少々の解答ミスや誤植をあげつらった自分が恥ずかしい限りです。また、当時の軍事郵便についての知見や九州における熊本の地位の変遷について、大変興味深いお話が伺えました。そして何よりも心に響いてきましたのが、田中先生の平和に対する思い、無念のうちに命を散らしていった当時の若者たちへの憐憫の情でした。明示的な言葉にはせずとも、田中先生の一途な思いややさしさが、行間から、そして言葉の端々から沁みだしてくるようでした。来年の大会でもご発表頂けるとのこと、今から大変楽しみにしております。素晴らしいご発表をありがとうございました。

(拝田清)

◆②五高の入試英語問題を時局という要因と関連づけられての御発表でしたが、他の学校の入試問題との対比による分析などを交えて、ぜひ紀要にご投稿下さい。

(Dragon)

<発表を終えて>

田中 正道 (広島大学名誉教授)



ここ 10 年あまり、戦時下の旧制高等学校入学試験英語の特徴を浮き彫りにする作業を継続している。戦時下の旧制高等学校入学試験問題には各学校の特徴が良く伺えるからである。今回の発表ではナンバー・スクールの一つ、第五高等学校入学試験問題を取り上げ、以下の諸点について言及した。

1. 典型的な旧制高校の出題スタイル、すなわち英文和訳と和文英訳で構成されている。但し、第五高等学校の英文和訳は設問数が原則 5 問で、他の高等学校 (2 問～3 問) より多い。これは受験生にとっては有利で、どれかの問題で失敗しても他の問題で挽回できる。
2. 戦時下にもかかわらず題材内容がとてもしベラルである。この点に関しては他のナンバー・スクールと同様である。
3. 昭和 8 年度ならびに昭和 10 年度に「書き取り」が出題されている。但し、第一高等学校 (この学校は毎年のおよそ 60 語程度の「書き取り」を出題している) のそれに比べて約半分くらいの分量である。
4. 経済的な理由等で高等教育を受けられない多くの若者が戦地や外地への移住を余儀なくされていた事実を忘れてはならない。当時の社会情勢が伺える資料をささやかではあるが紹介した。フロアーの皆様から貴重なご教示、コメントをいただいた。感謝申し上げます。

◆②戦時下のナンバースクールと高等師範、高等商業などの入試問題がこれほどまでに異なるとは初めて知るとともに自分の不勉強を大いに恥じました。またフロアとのやりとりの中で、戦時色の濃い問題が大衆による「迎合」の中で現れた可能性について指摘がなされており、こちら大変楽しく拝聴させていただき

ました。 (上野舞斗)

◆②入試問題の内容を読み解くことを通じて、1930～1940 年代に戦時色が強まっていく傾向がわかり、「入試問題と戦争」の問題を深く考えさせられました。先生の一連の入試問題研究が本になることを願っております。

(みかん舟)

>> 事務局より

会員のみなさまには、会費の納入にご協力いただきありがとうございます。未納の方へのご案内は郵便もしくは電子メールで順次お届けいたしておりますので、引き続きのご協力をお願い申し上げます。なお、ご不明の点は、お手数ですが事務局 (会計担当) までお問い合わせください。よろしくお願いいたします。

問い合わせ先 事務局 (会計担当) 河村和也
電子メール: membership@hiset.jp 電話: 0824-74-1727 (研究室直通)

*事務局よりご連絡を差し上げる際、membership.hiselt@gmail.com のアカウントを使うことがあります。あらかじめご了承ください。

>> 新入会員

- ◆ 下 絵津子 (しも えつこ) 大阪府 近畿大学総合社会学部

)) 英語教育史フォルダ

本学会の会員であった故若林俊輔先生の遺稿集『英語は「教わったように教えるな」』(小菅和也・小菅敦子・手島良・河村和也・若有保彦編)が『英語教育 10 月増刊号』(大修館書店)の「英語教育図書：今年のベスト 3」に選ばれました。当該記事で本書に関連する部分を以下に掲載します。

(前略) 本書は、故若林俊輔氏が書かれた雑誌等の記事から、現在の私たちが日本の英語教育について考える際に補助線となるようなものが選ばれ、解説とともにまとめられたものである。

40 年以上前に書かれたものもあるが、若林氏の言葉は現在の英語教育に多くの示唆を与えてくれる。

前半は、学習者の視点からの授業改善についての記事がまとめられている。生徒の既習事項(英語の授業以外で学んでいること)についての知識を生かした授業づくりや、知的好奇心を満足させるような語彙指導の重要性等、授業づくりの際、見落とししてしまいやすい視点を与えてくれる。

「語彙や文法はこう教えるべきであろう」とか、「テストの形式や採点の方法はこうするべきである」、といった固定概念を知らず知らずのうちに持って指導してしまっていることがあるように思う。そのような固定概念にとらわれず、生徒に「英語学習の目的意識」を失わせない授業、生徒が「わかる」授業づくりについて、具体例をふんだんに挙げながら説明されている。

後半は、教科書の問題や学習指導要領の変遷、英語教育史から学ぶ意義などについてまとめられている。過去の出来事を学び、現在のことを知り、未来を予見することが大切であることは当たり前のように思えるが、現在の英語教育の制度などについて疑問を持った時、その答えを歴史に求めようとするのは意外に少ないのではないだろうか。本書を読めば、現在私たちが議論していることが、実は今になって浮かび上がってきた課題ではないことに気づかされる。

私自身、若林氏の主張を読むことで、公教育としての英語教育の在り方について改めて考えるきっかけとなった。「英語授業」は過去から比べてよりよいものになっているのだろうか。本書で挙げられている英語授業の課題と今私たちが話し合っている課題の共通点の多さに驚くとともに、新たな指導法を考えることも大切であるが、これまで日本で行われてきた授業研究をもう一度見直し、その知見を踏まえた授業研究をしなければならないと語りかけられているように感じる。

小・中学校の新学習指導要領はすでに告示され、高等学校の新学習指導要領も今年度中に告示される。高大接続改革の一環として大学入学者選抜改革の検討も進められている。このような時期だからこそ、これまでの英語教育の歴史を学び、今後の授業の在り方について私たちが主体的に考える必要があると感じている。その際、本書は私たち教員に多くの視点を与えてくれるだろう。

(松下信之 (2017) 「【英語教育図書】英語教育・今年のベスト 3 (その 1)」『英語教育 10 月増刊号』 p.74)

(前略) 2003 年 3 月に亡くなられた、東京外国語大学名誉教授の若林俊輔先生の膨大な雑誌等の記事や絶版になっている著作の一部、計 46 点を掲載したものだ。それに若林先生を全く知らない 30 代前半までの若い先生方にも理解していただけるように、編著者が現代的な解説を加えている。私は、その「まえがき」の部分を書いており、非常に手前味噌な書評で申し訳ないが、あえてここで取り上げさせていただく。何故、そんな過去の先生の著作にこだわるのか。それは、常に、現場での様々な問題に目を向け、時代を 5 歩も 10 歩も先取った斬新な考え方で、日本独自の英語教育の道を切り拓こうと挑戦し続けた先生の言葉は、現在の英語教育において私たちがかかえる諸問題になんらかの示唆を与えてくれるものではないかという期待である。内容は実に多岐にわたっている。授業に関する学校英語の中核をなすもの(発音・文字・文法・語彙・言語活動等)、指導技術的なもの、教科書に関するもの、「学習指導要領」に関するもの、テストや評価に関するもの、英語史、教員養成等々である。

「第 1 章 いっとう りょうだん」では、「小学校への英語教育導入—それは我が国の基本教育の破壊である」というタイトルのもとに、「小学校の教育に十分にゆとりがあり」「そのための英語教員の養成が、確実に先行され」「同時に『英語カリキュラム』の開発」がなければ「やめたほうがよい」と結論づけている。1997 年に書かれたものである。そこから、20 年が経ち、いよいよ小学校 5, 6 年生には教科として英語が教えられることになるのであるが、はたして、若林先生が挙げた条件はクリアされたのであろうか。先生が心配していたことは、現実のものとなるうとしている。

学習指導要領、教科書検定、週 3 時間体制等、当時の体制に対するかなり政治的な発言もあるなか、先生が最も求めたものは、「言語教育としての英語教育」であった。「第 6 章 英語教育にロマンを」では、「英語についての『素朴な疑問』」として、This is a pen. の This と is を入れ換えて Is this a pen? とするとなぜ疑問文になるのか? と書かれている。このような疑問を「くだらない、昔から決まっていることだ」とするか否か。そこが納得できない学習者はゼロだと私たちは確信できるのか。この記事は「知的好奇心に答える英語教育」という項目で書かれているのであるが、是非ここだけでも読んでいただきたいところである。英語という言葉への自分の捉え方の甘さにハッとさせられる内容が満載である。

書名は、「(問題のある教え方で) 教わったように (教えると、問題の再生産になるので、そのようには) 教えるな」ということである。現実に行き詰まった時に、逆にハッピーで授業には問題がないと思っている時にも、オススメである。

(小菅敦子(2017)「『英語教育図書』英語教育・今年のベスト 3 (その 2)」『英語教育 10 月増刊号』p.76)

)) この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 266 回研究例会 2018 年 1 月 20 日 (土) 東京で開催予定
- ◆ 第 267 回研究例会 2018 年 3 月 17 日 (土) 京都で開催予定

* 今後も日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、以上の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (7 月発表希望であれば 4 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

日本英語教育史学会 第 266 回 研究例会

日 時 : 2017 年 1 月 20 日 (土) 14:00~17:00

場 所 : 順天堂大学 お茶の水キャンパス第 2 教育棟 502 教室 (東京都文京区本郷 2-4-4)

研究発表① 日本における外国語教育の政治力学 : 戦後の自治体政策過程を中心として

青田 庄真 (日本学術振興会特別研究員 DC・東京大学大学院生)

【概要】本研究では、日本の外国語教育政策を総体的に把握すべく、先行研究の多い中央政府に加え自治体に着目し、どのような自治体が外国語教育を推進してきたのかを検討する。その際、国勢調査等の自治体の特徴を表す経時的な変数を考慮し、学校基本調査や自治体を対象とした全国調査である青田 (2018) 等における自治体の取り組みについて歴史的に分析する。

研究発表② 岡倉由三郎氏語る「英語上達の第一条件」

島岡 丘 (筑波大学名誉教授シニア・プロフェッサー)

【概要】岡倉由三郎は 1927 年の出版の冒頭の一節に「正確なる英語の発音は英語上達の第一条件である」と記しています。これまでの英語教育の傾向は S→NP+VP に象徴されるように文法を偏重したために英語の「正確なる発音」を軽視する傾向が現れました。本発表では、由三郎の言う「正確なる発音」の意味を深化し、特に「音声特徴の意味」を Jones 以前の Jespersen, Sweet などの主張に見落としがなかったか、また Fries などのアメリカ構造言語学の mastery of the sound system と関連性を改めて見直したいと思います。

参加費：無料

問合せ：日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiset.jp)

◆例会終了後に懇親会を行います。こちらにも奮ってご参加ください。

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。

【会場案内】(順天堂大学ウェブサイトの「交通アクセス」(<http://www.juntendo.ac.jp/access/>)にある「本郷・お茶の水キャンパス マップ」より)



- 【交通案内】
- ・JR 線「御茶ノ水」駅 (御茶ノ水口) より徒歩 7 分
 - ・東京メトロ (丸ノ内線) 「御茶ノ水」駅 (出入口 1 または 2) より徒歩 7 分
 - ・東京メトロ (千代田線) 「新御茶ノ水」駅 (B1 出口) より徒歩 9 分

EDITOR'S BOX 若林先生の著書が「今年のベスト 3」に選ばれたことは個人的にもうれしい驚きでした。過激な言葉遣いの裏にある、先生の「ことば」に対する愛情や「ことばの教育」が置かれた状況への危機感に、一人でも多くの若手教師や教師志望の学生がふれてもらえたら幸いです。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 geppo@hiset.jp)